百物語評判書之三目録

第一　参州かぎ新出門おれ松童子よ化し事
第二　三宅神の殺的れ事
第三　天狗の所決付洛西嶽来聞持の事
第四　猿神の事付者陌の事
第五　貪欲神并韓退之送窮文付范文正公の事
第六　山姥の事付一休の相法并狂言の事
第七　比叡山中堂油盗人と云化相付寄宿れ事

三品久保長篤

百拍浮世物語巻之三

第一　参州長篠村長寿寺門前松童子にげさるの
叓

ひとの人ものいたく集生ハ三河のくに産ゝ国なれ
ども　ぎなる事ゝ侍りしハ加茂郡に長寿寺あり
門前にむしろしきて松二本ハ産ゝ侍りしに
をさゝ成人ゝ成し松二龍松と申し松大木にく
いづれも時より極をなしゝ物ごとなるに成ぬ
へ童子二人ありて云風うるはしき者ゝ
松ゝ侍りしに碗にしゝ
て生ゝ童子ハ一首ゝ侍りさはけまり

客路三川風露秋　袈裟一角事勝遊
二龍松樹千年寺　古殿苔深僧白頭

此詩はさる人ゆきくれしに寺僧あひて其夜
さしも見えたる彼門前の松の木陰に行と見えて跡なくさ
なくなりけれバ皆人松の精の童子となりきたると申侍る
されバ此詩人と同けれバ先生評じて曰く此事既に
ある書の中にもためし多からず松も形漆乃
木精の化する事ハ化生と申なるにして目の前に多く
ほかるはなり朽たる木の蝶となりてくされる草の螢と変
ずる事何れも見る所なり殊更松ハ衆木の長
にして年久しき物なる故君子の徳に比べらるゝ其童子に
成しをさとおもんはかりし既童子と成て人の寺のほとり
に住のなれバ詩をもつくるべしかざ古にハ古き桐
の木の人に変じ来りし我智通と云し出家をたぶらかし
事も所見えし此書にも見えたり

第二　道陸神の發明の事

先生の云世人のいひならはせる道陸神とハ道祖神共
又ハ祖道とも云又塞の神の事なりなんど事ある神
なり其傳ハ祖とも云又此神を祭りて旅行の風雨にて
ちふりの神などいへり袖中抄に云ちふりの神と云

仏なり書くぐ多にまちまちの神に奉しかの
ぬさの和ひうぜやまびとふうなんと傳り源後の国紀
文利の湯とふ所よりまつりたる宮とう神たりまた
とり古今の序に住吉の神ものの歌を作るも
このこと
ひすなりもろにしにも黄帝の子累祖と云人も
とぬさくるに死のひ紙後の世にまつりて行神
とりかくえばそわるのち黄帝は子紙函和
祭りとにいのしびくべはまど和漢ともにもわざの
ぶ仏なりしに紙をとの世に四条を京と女童部の云
なしに伝るいとう紙に拾ろう石佛さ面ぐれ妖怪を

は人紙駄さ世紙駄と云りけるく拾ぎろに中者の
こ物なき人の志にれ石をりけるそも必仏作さびと
てそ下に亡者れ法名紙を物をりとれ人婦毎に名号
とり法ろうびとしその法名なく墨霜のに浦
ろそを消せ伝ろに佛郎半人鼻うげ唐うけな
びうのうりけ紙少作ろばうり丸赤こをんなな姫
うをくきに拾也法にりふくされく何もの人乃
志湯もと光来にに只石佛とのをみな人行人つま
四ろよ備を拾若白系のか彩六波羅寄れ仏作
なり菩薩當不極の法華紙奥一巻にして仏新

ふかわるく人よ拾ひ世に用らまるべやうくかの災
をなしまふ魔をやそ妖をなせる地を石佛ふいわ
ばそこをみくいかるべきを孫をなきを亡者の妄念ふ
て天地の間に流行をる亡魂時ふ邪気につまく
或ハ瘧鬼ふ形ふ又ハ疫神ハなりく人ハなやま
ばるなりべそ世ふ疱疾疫病ハ風り伝
時ハ雲陽ふ移まるる石塔ハ魂とく志ゞり或ハ
半ふハ枯骨ハ門戸にけく甚魚鬼をれどし伝
ふまゞるひあり或人の云くそハ佛を志ゞりく魂の
拾ふ事ハ何ふ云く色仏法志ゞるにわばそ

屬火分不の亡魂ゑいまし免こゝ法なり云くまたくべ
即もこゝ結にさげまもしくる亡魂そ病ん法ゑ知りく
なやませるにや云さたいわゝ法天地の間多く善惡
の二氣なりそまこゝ人實ゑ惡鬼そまたくまハ彼
乃惡氣を逐くなり是一佛法信書ゑれば三世
法仏の本懷になるゆと云仏なり又云瘧ハをゆ
脾胃ゑ虛より生る不なりそ氣に法病とかゝる
おこれるゆをそ時必定を法そ脾胃ハ五行の
の配當に土にゝく五常ゑ信ゆあゝ法をハそお
ゆまゝ時言をたゞそ氣と信なり勿論そ病ゑゝ法

不そ脾胃なり病ハ体の惡氣ゑ世の私氣にをし
て人ゑなやはし法なりされゆや諸病とかゝる
二病ハ醫ゆをはじなゆ法なり法ゑ法なり又云志ゆまゝほど
なり石佛なゝべいゝくなをそ繩法ゑしまゝ書
也法そなゝ信書ゆ法ゆめ云れゆ黃法なを
ど私氣なりそを又見ゝ時ハ私氣にあゝべ惡くハ
又惡ゑゆ不ゆ惡ゆゝ法ゆを惡ゑなゝを向ゑなゝべ
さそを佛体に寓にゝ私氣なゑゝにくゝ人べ
知いを是ゆ又云法そ理をゆまそ法ゑ知りゝ
人のはじなひていゆゝ法ゆ勿論なりそ理をゆ法

人を海ずんだいぶつ云ふ事のはじなれば
そ理法初りしら人のこ世にわたれば兵を伝へ世
伝作にしたがつくそ志所しい伝なりその功の他
者にあり其徳いそ窮なしとなるべし

第三　天狗の所法付　法習嶽求関拍の事

一人の云て狗とふ地ハ人の世に法ぐらにそ形
法人さるふ者なれどもいみへしらそそぐ
と絡ゐと出又行を逸しそ拍法とも毋く四方へ
狗中ものさ法さうにおそ色き事此人ハ伊
勢山西ふ拍頂氏集ひて拍法いさされひハ周防

の國智通とふ出家法習嶽求関拍乃
法法ひ法ひ度ひ所をけるに此所ハ麓所なる拍人其
法法狗ひさきよりハ生くとふくそ法法狗
しけるに七日おるる法像に大風吹来ふとふしず
彼求学狗ふる僧いづる人法ぐんえばり
ぜれバ上にてめぬ事不思議の狗と思ふの雪
毎年ばりあるく周防ふる法僧いみく此法急法
ふくそ来ぜしゞ上ふ人名ちな紀とふ法世法を
月ば伊勢ばくら世月と同月なり寿百世を乃
と一月ゞ周よ法ぜしゞを度又を古代此新人

さとけるをあやしむる事にあらざれば
其外家にありとも礫を打事度々ありといふなる
術を得しものは飛行自在にして仏ともいへ先
生なく天狗といふ名は是より起りしにや又獲と云
獣の異名にて天狗と称まと此類にあらば又星の
名にて天狗星といふあり史記天官書天文志等に
見へ出るはいかなる星ともしりがたし只魑魅とのひ
魔の障碍なすをいふ時は実に天狗のなすなれども
是皆深山幽谷にすむ魑魅の類なり其所に
ありて多年多力なる物にして其怪をなすなり

狐に百倍せり木を抜岩を砕き風雨を起し自在
はし大小の身を現ぜり順が和名集にはあまつきつねと
と和訓し獣の部に入たりけれバ天竺唐土
の魔の類と一所にもあらざれども本朝の山谷の
気より生じたる物のなれば其所を棲とすると云
んざりは其ものを以て変化自在なれバなり世俗に
太郎坊次郎坊など云て山伏の姿に云付せる
は其住心悪念をもつて山に籠るなどいふ出家の
住心なまじいなるも目に三途川の苦しみを見ても
怯るといふ人間とても悪しき気に染まりて

ぬくこれほどつよくはなきハ熊九郎のひみつとしまれど
そいつまつ九郎あくていふなるべさく此妖怪なる
らば人倫をさかよわるハ是純法の変りなり生れつき
なまじハ人家なのどあくはぐさてたゞしき気のわるい
きつもつまわるそ形をうすぐひみや伝んされば
浅間嶽のつゝざとにありなんし又天狗原と云
事あくゝ狸のこゝざなるよしたゞ変化んをきり
狸と数一番くゝひてこゝし先雲なぶきれど
そのものばつ九郎しよ著図集に見えたる九郎の伝
にゝ性力九神をりとなるとなるぞ不なれ〻ケ様の

類よ似たる法をうけ人たとへさい生べき性き事をおのづから消うせて行生と終生き

才記　鞆形の事付煮酒の事

かくのごとく同く云世よ鐵形ともいふものあつてたとへ生き時に落生るのやうなる抱の氣一付て毒となして人家の形ざけ紙ざめさせうれる人刀紙ぬきて切とも生べき形多ばき所るとこの紙とも紙ぬ抱うとつ毒紙ぬ生べきのみやとのけ生べき先生言くいふく見世界の形れ精市中に麻くく抱なりきこ仙ふくとそ抱わつ生ふそ精

ゆゑに生ぶ陽の精ハ月となり陰の精ハ日となり金石ハ精ハ星となり生べき鐵ハ鐵ハ人ゐるハいばる抱なり生ものそ集るに及くそ精なれ抱ものとなり又同云く子母鐵とハ磁の石麻ハ云く是仙術のひとつはして首ふりハ仙そ法ハ生ものとふ鐵と仙ふ出のいこのごとくなる子紙茅村ふ生ばなるとやれば母ゆゑ子ぶ生ふ紙ふるとて母ハ無紙ぶ子ハ無紙と又ハ十一の鐵ふ鐵ふ子ハ無紙ハ又ハ十一のそ方ハ紙紙ハ市にあく抱紙愛子母ハ鐵紙ふ子母ハ鐵紙ふ抱ふ

事也といつり子母銭成豊憂貧と唐の人伯夷
と山中に住うされども和漢の書を推知ること少
住ぶそを稀の紀つまを和し富さを天ふなぞ人
間の方なるハ地ゆくさどりくを孫にしゆくハ女媧氏
の世より作りあそりゆ中和ゆくハ雪氏宣帝の時より
稀ゆけうとやそう又ハ開基太平方を勝宝元宝通
宝なぞく物ゆそをつにしゆくを年号に加てを
名とそり開元清和の類をなりむしりの新さ
物出来てを古さハをを時もわり又新舊共
ふ見ひらゆく政をわり皆を時のををさに酒り

物式銅銭どのをいうなるびはしゆん者わるを世ゆの
なるもちうぼるゆほしく思りされ共類を思ふ拙ゆく
甚ゆをさふよハを孫うぎれをを集りをくうさふよハ
うゆく宝元一銭の富をかるゆほ然中和漢と
をに私ハ稀事を法ゆをさ禁制なり金銀銅銭ハ
名うるさ拙なれど私ゆを稀なりしを作りハ作りぞ
や銅銭ハ通用の宝ゆく金銀ハ私の宝なきだ
なりそを人の富饒貧を命なるうと
銀迷毒宝を稀ハ推う貪りん弟人力にりて
貧富を自生よをバ人ゆく天ハ勝るなり量りく天

小椋山や又椋の数と九十六条にをよ事いづまの
時より宮つとゝ芝に来給し庫山とゝ時とゝ和よ
よる九十五条或八十五条又十七条なるもあり古紙
者陌と云よし明楊井菴の冊紙拾遺録より見さり

牛頭

貪食神 韓退之送窮文范文正公拾遺事
ゆるゝの云玄地のゝり云ハ河西わゝ氏さいめて
まゞしき者何ものもたゞ紙ゝるゞごゝくゝるゝ
を他ゝくゝゝ年を仏ふゝるゝゝやをんかゝくゝやの
らゝと身れをゝゝ巣ゞゝゝわゝ地仏ゝハ初
ゞゞ肩のゝゝりゝすゞゝ地蔵ゝ云わゞ人ゝバ

人形ゝゝ眼鼻口舌とゝ彼貧者ゝゞゝゝ
て海何者なれゞ家肩ゝゝ蔵ゝゝ云ハ若ゝ云家
世ゝゝゝゝ貪食神ゝゝゝ目ゝゝゝ身に宿ゝを
者なりと云ハ貪食神ゝゝゝ書ゝ紙呼ゝゝゝゝ
嫁ゝゝ山目ゝゝ山ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ海ゝゝと
ゝゝ国ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
国ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

神は諸方の貧乏神はさまざまたらうへに山海
まで新義神どもこの宝ものうばひ来なれり
而なく落く前後のへバ彼者鼻さかくわるき
ものそうりと事代ひが若山神ひたもつのバ
世のうをとりそ隠しき者にく面屋ひと同けまバ
人生涯くいとく山神さ彩鬼と名付ら丈人の
貧富に天命の稟受のあつさ落さにられバ賢
君子孔孟義西く智恵四のといへも如何ともす
ら能孔子新測曾参原憲の類あげて呼ん
ぶ絶せ為なり者も強く貧困なり富を

ゑひして、そのあとをとゞめしほう、刑戮に
あゝたゞひ山天命にしたがひて、ゆく末の
ゆくゑ、世の光をかゝやかしけ
ん。仏家にいう極楽世界とは、云の宿業と
云ふも害あるにわらばかく天運にうなれば神を
司ふもわるゝ所業ぞ。唐の韓退之とやせし大儒を
正月朔日に酒肉をのゝ勇て文章一篇をはらう冊
ゆく霞鬼をとゞめり。宋の陳摶ひしらぬ一生が罪不仕合のと
打嘆ゆゑ。宋の陳摶といふ詩人の詩ふを韓愈推
究不玄樂天侍富々不来と作りしゆゑや又宋の范

文正公と云ふ宋の一人の人ふかく学問を好ふ
いとしなひ人ふ絶ひて後に饒州の吉凶を養職ふ
ひて家富門栄ふ
浪人ありて渡世ふ
なりて合力に
うて山ふ
まぬ公なれど大
地折米六月の
税ふ麦と数万石
てうなれ

文正公ハ宋の一人の人ふかく学問を好ふ
ひて家富門栄ふ
浪人ありて渡世ふ
なりて合力に
うて山ふ
まぬ公なれど大
地折米六月の
税ふ麦と数万石

をあらふ色とて猶ものよみ悪ゆりくりとゆくハむ
ぎをそれくに書をうつあり古今無比の秘
本ゆゑ世くに著にのこりあるて猶りとやされ
し所文正公を彼方こちと力紙おとしぬさくそなは
文正公伊尚らるくハ別よ晋の王羲之の石碑あり
是を石ぎりにうつはゆゑ数を費重一行ゆゑ費
風ひうしとされども乗人の是をうつりあるこゝ
あれ書を後なれハ世易りて別を石物一百数
をうちのみをさ紙硯をそのゝ身ひ流ひゆく
の目新のゆゑべきとて色に拓付きを流的

その西へ文正公と伝に出ゆゑ二きと宮ゆうしと義
傷ゆ公氏ども来てゆ風う今夕傷ゆ夕色て雷れ
の石碑へ蒙ひが風晴くなほ見ハ石碑微塵ちにぶ
ものいちへ光風ん沙ぶ紙ねぶとゆけりそ
の安をうまべき拓をゆくて色ひ流しくきか
ゆりゆめ流ゆゆうなる文正公を変生にうち
かく金沢ゆ郎ゆ郎ゆ数のさまりゆハ是ゆみ
を及ぶゆゆなるべや東坡が一夕雷轟鏡別碑と
似しをゆうと叫うて亡さ

第六　山城の事付一休拓寺粗の事

又同くいろく世よ山姫とらい山ありて人をさろはし又
い人の女房にだけろ拾物なぐも伝ふが実は女よ
てはや不審さよと云あるふ人生海ろくいろく山
姫といはゝ源山幽谷の鬼魅の精らもし山世界な
きバ山人ありけるあきバ山奥まぐそ乗のあるま
海あるくハ鬼魅の精あるはじさよあるぐ伴そ
姫とろくろハ誘田姫山姫なぐの目未ぬ云なるしに
なるもじそ名ゆ付くもげるさのあるにつばひ
さろうと糸つひく飛うに淫の曲舞ゆも泡ゆなる
色さく又山曲舞を一休和尚似りゆ人付伴

わきバ鬼生わり裏生わきバ山姫ゆありと似くく山
写ぬ初ゆ写ゆとわりへろ付蜻蛉の影去萬事まく柳
孫ゆ乞ろれの糸くとれりぐわとさ紀相逆ぐ伴ら
舞と付くゆ山ことなるハさり又ろ山ハ糸ぐ伴
拾逆ぐく意の狂言の強し山姫とろろ
こち秘ゆ泡と袖よろ右ゆ
春されぐころ乞ぬ舞ゆ忘乞ひく山めりして

第七　敵山中堂油屋人と云ぐ拾付書ゆ事

四人の人の云ぬ中西社擅規の某師とろ人の拾
沸よそのこと敵山金盛のみぐり中堂の油神そて

きこの方石ばり初めしに近所の俗人此油粕を
買つて家富けるを世ゝ時移りて此粕
退轉せし六山京近江の俗人世にはいるさ事に
思ひ始めて嘆き恨しが孫より此すを思ひ起に
て死かりそほ毎日山者の生ゆりひらおも
先く中堂の方へ来く彼油売れ人形と成ぶ
そちさ四ちの恨しの恨所わなぐち油と盗みとあち
ざまと清人油盗人と名付さらんやりおの者看
大乱流雪くめ福中をそ者の無心油ふんな、
見ざる所とよ来ちなりびしちゆてんやくく

引去法施をもつて葬送仕りけるに
ごとくそ時哀みなりて葬送の
の中に彼死人の抱ける
乃ちへ来りしかば何事もわつといふ事にて
を見に出て行く中にたつる者多くしかも
かば怪る場を見て首尾を編て葬送の
見るとて百度ばかりの事にて
のはい給くに来て只とを面白なるにそを見
抱ける者にかくべく何事もしんかくあるべきや

と問ふ是ば先生答へいはく人の怨霊の来ること
何の此事に付くやとこたへ
ばく伝ふ所を油盗人の
なかるべく消ゆるの
ハ是を死ある人の精魂の多少
にりて亡魂の所ゆるにたのたびあ
ゆきとにいりて
結ふくへ書なりし
の郡あどに
を隠しハ

用のゆゑりと相違ゐくらばしとりてをさめ
思ひ知るる度くなりとロきされば其ゆゑ
をとに成りて其由ゆゑを詳にや伺ふ事

第八　法華経猫のさとりや付観音法華経の事

加賀の人の云く法華経に祈こゆさとりの相あるは
去る寅の年ゆゑ所に猫ふいりて彼猫をとりけた
る事にはたをそれしき事あり此なぶ風説なり
猫の化るる所は尾ひんぬ不審と云れん先世
いかなる故ゆゑ祈こゆ祈こゆゑ下
と聞しに尾ひんぬ猫と置あるなど祈る

たとハゆゑ強わるとゆゑ名なり法華経に虎と類
せりゆゑ虎に成て飼のゆゑなどゆゑ唐土にも
猫のごけてゆゑ人を殺す多ゆゑ猫
まれつきを見るに智あるあるを法あ所を
何ゆゑゆゑ膝にすりてゆゑ人に馴る分と人を海
ゆゑかと思ひ時ハ引むく事ハ縄をゆく引
時ゆゑ必ずゆゑ猫ゆゑ人にとゆゑをなら
ざるまと自ゆゑ結ふゆゑあり女ハ性ふ似りむ
ゆゑなり化て老女ゆゑ人をたぶらかと云る事
猫ゆゑ尾の能ハ狐と亀尾ゆゑ睡ハ十二時ふかゆゑ

大小ろと氣味よ所色況身ハなぐ仁皮の毒もの
雅樂とみぐろ個子あり色とべさ地にてそらへ
者ハ猫かくさく嵐ハしめひるかを畜をけ先又
嵐ようさ海らげろ色ろ匂さうんかを色ろ
又著図集よ観ぬ法華経の山庄にく叫猫
と飼ひかようを出さえるまバ秘蔵の宝刀とる出て
玉にろ場げる仲の力をくらく行地やうん逆矣
ぬ人く弱味を天ろ行ぐさ知まびぬのさ山猫魔の
変化とやく人く沙法行りとろをり光角怖ぬよて
百拍法深制まくさ三孫

たとハそ強わるとろ名なり法歟にく虎と類
せりそ乱にて飼のろなどを云り唐出にくも
猫のぐけてそを人と称ふ多ろ寄りそむ
まれつさをろるふ智ふをわ法あ所ふを
何ろをそ毎勝にりそ人に引を分と人よ海
ろかと思ぐろふ時ハひよく来ば縄とぬくり
時を必ばろりぐなるぬぐち人にさふをにをなり
ざめをと自ぐ乞ぐ給ふひあり女ハ性ふ仏りむ
ぬなり外化て老女とぬく人をたぐろ所ろと云る事
物を肉の鶴ハ猫と毎肉をり時ハ十二時ふかりて

大ふるさと氣味悪敷況身ぬぐひ仁皮の手もと
雅樂とみゞら個ようりゐをべさ地にてそうへ
者此猫ゆくゝ嵐せ仁しめひるゐ畜をけた又
嵐ようさ海ゆげたてゆ仁色呂何さんふきたし
又著図集よ観者活面浦源の山庄仁くゆ猫
と何しふよゝ玉せ元ゐまバ秘花の古刀と元出て
玉仁ゝ場けた件の刀をくらくゝ行花やん迎矢
め人ゝ見乗ま天ゝ行ゞさ初まびめゆさ山猫魔の
変化とゆ人ゝ海活仁ゆりとちゞり光角怖ぬよこて
百物語評判難波の海三終